

夏の訪れ



クロノイト

夏の訪れ

目次

第一章	上京	6
第二章	近くの商店街	10

第一章 上京

窓を開けると、熱を孕んだ風が薄いカーテンを押し上げた。数ヶ月前まで過ごしていた雪国の湿り気のない風とは違う、肌にまとわりつくような東京の初夏の匂いだ。

六畳一間のアパート。引越しの段ボールはようやく片付いたけれど、自分の生活というにはまだどこか余所余所しい。大学に向かうため外に出ると、アスファルトからは陽炎が立ち上り、駅へ向かう人波の熱気と混ざり合う。地元では車移動が当たり前だったから、こうして自分の足で季節の移ろいを感じるのが、未だに少しだけ新鮮だ。

講義の合間、学食で頼んだアイスコーヒーの結露が、ノートの端を丸く濡らした。周囲から聞こえてくるのは、聞き慣れない標準語の軽快なリズム。不意に寂しさが込み上げそうになるのを、冷たい液体と一緒に飲み込む。

帰路、スーパールの軒先に並んだ真つ赤なスイカと、どこか遠くで鳴き始めた蝉の声に足が止まった。「暑いな」と独りごちてみる。その言葉は誰に届くでもなく夕闇に溶けていったけれど、自分だけの

時間が着実にここにあることを教えてくれた。

東京で迎える、初めての夏。不慣れな暑さの中で、私は少しずつ、この街の住人になっていく。

アパートに戻ると、昼間の熱気がこもった部屋はひどく静かだった。換気扇の回る音だけが、生活の記号として響いている。地元にはいた頃は、夕食の準備をする母の包丁の音や、テレビの音がうるさいとさえ思っていたのに。今の私は、その騒がしさがどれほど贅沢な体温を持っていたかを知り始めている。

冷蔵庫から冷やしておいた麦茶を取り出し、グラスに注ぐ。カラン、と氷が鳴る。その小さな音にさえ敏感になつてしまう自分がおかしくて、私はふつと息を抜いた。

机に向かい、レポートの資料を開く。ふと視線を上げると、窓の外には隣のビルの隙間から切り取られたような夜空が見えた。星はあまり見えなけれど、代わりに街の灯りが地上の星のようにまたたいている。眠らない街、東京。その無数の光の一つひとつに、私と同じように今日を終えようとしている誰かがいるのだと思うと、少しだけ孤独が和らぐ気がした。

ふと思ひ立つて、地元の友人に短いメッセージを送ってみる。「こっちはもう蝉が鳴いてるよ」と。数分後、返ってきたのは「こっちはまだ肌寒いよ、風邪引くなよ」という、相変わらずの調子。そ

の文字の羅列が、遠く離れた場所と私を繋ぐ細い糸のように感じられた。

明日の予報も晴れ。気温は今日よりも上がるらしい。私はまだ、この街の歩き方も、地下鉄の乗り換えも、自分にぴったりの冷房の温度設定さえ手探りのままだ。けれど、汗を拭いながら歩いた今日の記憶は、間違いなく私の「東京」を形作っていく。

サンダルを新調しようか。それとも、小さな風鈴でも買ってみようか。そんなささやかな計画を立てながら、私は少しずつ、この新しい季節を受け入れる準備を整えていく。重たい湿気を含んだ夜風は、もうそれほど嫌なものではなくなっていた。

第一章 上京

第二章 近くの商店街

大学生活にも少しずつ慣れ、時間割の隙間を縫うようにして自分の居場所を探し始めた頃、私はアパートから駅とは反対方向に数分歩いた場所にある商店街を見つけた。

入り口には、年季の入ったアーチが掲げられている。そこには「睦海商店街」と書かれていたが、色あせた文字はどこか誇らしげでもあり、同時に時代の流れに静かに抗っているようにも見えた。駅前の再開発で建てられたガラス張りの商業ビルとは対照的な、セピア色の風景がそこには広がっていた。

商店街に一步足を踏み入れると、街の密度が急に変わるのを感じる。立ち並ぶ店からは、それぞれの生活の匂いが溢れ出していた。

まず鼻をくすぐったのは、香ばしい醤油の焦げた匂いだ。小さな焼き鳥屋の店先で、団扇をパタパタと仰ぐ店主の背中が見える。その隣には、段ボールに入った野菜が歩道にまで溢れ出している八百屋があった。



「お姉さん、いいナスが入ってるよ。浅漬けにする
と最高だよ」

不意に声をかけられ、私は足を止めた。地元ではスーパーの無機質なレジを通るのが当たり前で、店員と会話をする事なんてほとんどなかったから、どう返せばいいのかわからず、ただ小さく会釈をして通り過ぎる。心臓が少しだけ早く跳ねた。人混みの中ではあんなに透명한存在でいられたのに、ここでは自分が「個」として見られている。その事実にも、気恥ずかしさと、少しの温かさが混ざり合う。

少し進むと、古い惣菜屋があった。シューケースの中には、黄金色のコロッケや唐揚げ、ポテトサラダが山積みになっている。夕暮れ時というこ

ともあつて、近所の主婦や、部活帰りと思われる高校生が列を作っていた。

私もその列の最後尾に並んでみる。自分の番が来たとき、勇気を出して「コロッケ一つください」と言ってみた。

「はいよ、八十円。すぐ食べる？」

店員のおばちゃんが、茶色の紙袋にコロッケを放り込みながら聞いてくる。頷くと、彼女は「火傷しなよ」と笑つて手渡してくれた。

受け取つた紙袋は驚くほど熱く、指先からじわりと熱が伝わってくる。道端で立ち止まり、一口かじつてみる。サクツという音とともに、ジャガイモの素朴な甘みが口いっぱいに広がった。家で一人で食べるコンビニの弁当とは違う、誰かの手が加わつた料理の味がした。

食べ歩きをしながら歩を進めると、今度はどこからか線香の匂いが漂つてきた。古本屋の隣にひっそりと佇む仏壇店だ。その先には、店主が居眠りをしている金物屋や、派手な柄のブラウスが並ぶ婦人服店が続く。

ふと、クリーニング屋の角を曲がつたところに、一軒の小さな喫茶店を見つけた。

木製の看板には「琥珀」と刻まれている。窓越しに中を覗くと、鉛色に磨かれたカウンターと、ゆつ

くりと回る天井のファンが見えた。勇気を出してドアを開けると、カランコロンとカウベルが鳴り、コーヒーの深い香りが全身を包み込んだ。

「いらつしやい」

低い声で迎えてくれたのは、銀髪を後ろに束ねたマスターだった。私は窓際の席に座り、メニューの一番上にあつたブレンドコーヒーを注文した。

店内にはジャズが低く流れ、外の喧騒が嘘のように遠のいていく。ここには、都会のスピード感とは違う、独立した時間が流れていた。

運ばれてきたコーヒーを啜りながら、私は手帳を開く。今日の講義のこと、明日買わなければならぬ教科書のこと、そして、今感じているこの不思議な安堵感について。東京は、どこまで行っても冷たいコンクリートの塊だと思っていた。けれど、この商店街には、人々の営みが積み重なってできた「柔らかな層」がある。

店を出る頃には、空は濃い藍色に染まり、商店街の街灯がぼつりぼつりと灯り始めていた。八百屋の店先には、先ほどよりも安くなったタイムセールの札が貼られている。私はさつき勧められたナスを三本手に取り、今度は自分から「これ、お願いします」と言ってみた。

「ありがとね。またおいで」

お釣りを受け取るときに触れたおじさんの指先は、少し硬くて温かかった。ビニール袋を揺らしながら帰路につく。手に残るコロッケの油の匂いと、ナスの重み。それは、私がこの街に根を張るための、ささやかな楔（くさび）のように感じられた。

アパートへ続く道を歩きながら、私は確信していた。明日の夕食も、きつとこの商店街で選ぶことになるだろう。東京での暮らしは、まだ始まったばかりだ。けれど、この「近くの商店街」を知ったことで、私の地図は少しだけ色づき、孤独なワンルームは、ようやく「家」という名前に近づいた気がした。

第二章 近くの商店街

夏の訪れ

著 者 Chronote

発 行 所 合同会社Chonote

<https://chrono-note.com>

印刷・製本

© xxxxx 2026 Printed in Japan

本書の一部あるいは全部を、著作権者の承認を得ずに無断で複写、複製することは禁じられています。
